

2 度の経営学部長と大学院「マネジメント研究科」 新設についての私の感想 ——「風通しのいい学部を目指して」——



京都産業大学名誉教授 藤 井 則 彦

この度は京都産業大学経営学部開設 50 周年、かつて経営学部にて在職したものとしまして同慶の至りです。心から祝福申し上げます。

京産大経営学部に奉職して 30 年余り、この間、2 度の学部長、そして経営学部の大学院新設に 2 度にわたって責任者としてかわり苦い思いをしましたが、大学院も新設され、また個人的には 900 名余りの学部、大学院のゼミ生を輩出し、現在、彼等が社会の多方面で大いに活躍している姿を拝見しますと、いやな思い出も忘れて癒されます。

1991（平成 3）年から 1995（平成 7）年までの 2 期 4 年間、さらに 8 年後の 2003（平成 15）年から 2005（平成 17）年までの 1 期 2 年間の 2 度、学部長を務めることになりましたのは、学部には人材がなかったわけではなく、したがって、2 度目のときは最後まで就任を断りましたが、入学式が迫ってきて、学部長不在では入学式に支障をきたすとのことで、教授会で「1 期 2 年のみ、それ以上は続投しない」との条件で引き受けました。そして 2 年後には教授会で学部長候補の被選挙権を辞退しました。ところが、私以外に多くの辞退者が出たのは想定外でした。

なぜ 2 度目の学部長を引き受けざるを得なかったのかについては、最初の学部長のときに、当時、経営学部には大学院が存在しなかったため、学部の多くの若い先生方から大学院設置の要望があり、事務方のご協力を得て、準備を進めていましたが、90%以上準備ができた時点で、突然、時の学長の鶴の一声で不可能になりました。

当時は、我々経営学部の教員は経済学部の大学院に所属しており、経営学部は経済学部の下位にあるがごとき存在でありました。「経営学部は経済学部の軒下を借りて」と表現した先輩教授もおられたぐらいでした。その後も大学院設置の希望は学部内にありましたが、私は学生部長に就任し、この件については直接関与する立場ではなくなりました。そして学長も交代し、2 人の学部長時代が経過しようとしていた 8 年近く経った頃、再度、経営学部にて大学院設置の機運が高まり、9 名の発起人が選ばれ、私が準備委員長に選出され、発起人の先生方と経営学部の事務長をはじめ事務方のご

協力を得て、準備を進めることとなり、ここに経済学部の大学院「経済学研究科」から独立して経営学部の大学院として長年の懸案であった「マネジメント研究科修士課程（博士前期課程）」が実現することとなり、その後、博士後期課程も設置することとなり、このようにして準備委員長の私が大学院マネジメント研究科長となりました。しかし、学部長には別の人を推薦しましたが、大学としては学部長と大学院研究科長は同一人物でなければとのことで、2度目の学部長となった次第です。

今回の大学院設置についても、当時の学長から深夜12時過ぎに拙宅に電話があり、「どうしても設置する気か」と言われましたが、私としては経営学部の大半の先生方の長年の夢を考えれば、何かが何でも設置に向けて前進する覚悟でした。もし前回同様設置不可能になれば、私自身は速やかに京産大を退職するつもりでした。一般的には、大学院新設は経済的負担を伴いますが、大学自体のステイタスにとってはプラスになると考えられますが、なぜ当時の学長、理事会は反対、少なくとも積極的に賛成しなかったのでしょうか。

マネジメント研究科が発足し、現在ではマネジメント研究科博士後期課程修了者が全国の大学の教壇に立っており、活躍しておられるのを拝見していると、マネジメント研究科を設置してよかったとつくづく思っております。

マネジメント研究科設置の発起人のうち現在現役で活躍しておられるのは柴、佐々木両教授のみで、市川、井上、後藤、宮下、安永、山田の諸教授（名簿順）、西沢事務長、そして藤井はいずれも退職し、教授陣も大幅に入れ代わっており、発足以来15年の歳月の流れを感じております。最初の学部長時代に大学院設置を計画して以来8年間の空白の原因は一体何であったのでしょうか。

さて、私にとって、最初の学部長時代には、経営学部の教職員の皆様の協力を得て、全国経営学部長会議を本学で開催し、多くの全国の経営学部長が一同に会し、経営学、経営学部の今後のあり方について議論したのは有意義な思い出です。

また昭和56年に発足した「会計職講座センター」の室長として税理士、公認会計士養成に本学の卒業生で有資格者にお願ひし、学部の学生に簿記、会計学を教えて頂きましたが、残念ながらこの講座はその後閉鎖されました。しかし、経営学部にとって名称等は別にして、何らかの形で会計関係の資格取得の方法は検討すべきだと思っています。それは経営学部にとって売り物の1つですから。そして、その後、これらの職業会計人諸氏が中心となり、「京都産業大学会計人会」が発足し、私も顧問として参加し、老いに鞭打って一緒に勉強しております。

また当時、経済学部と経営学部の教員で構成された「経済経営学会」が存在し、研究叢書「経済経営論叢」を年4回発行し、両学部の会員学生に配布していました。しかし、ある事情が発生し、解散となりましたが、この件でも私は随分苦労しました。その後は経営学部独自にマネジメント研究会「京都マネジメント・レビュー」を発刊することになり、学部として研究に寄与しているのは大変結構なことであり、私も度々投稿しました。今回、この「京都マネジメント・レビュー」に駄文の執筆を依頼され感無量の気持ちです。

2度の学部長時代に多くのスタッフが経営学部におみえになりましたが、具現学部長もそのお1人

です。反面、将来を嘱望された多くの教員が本学を退職し、他大学へ移られたのは残念ですが、私は前任校での退職時の苦い経験から、大学教員の労働市場は自由であるべきとの信念から、学部長としてだけではなく、私の専攻の会計学の先輩教員としてむしろ喜んで送り出しました。

最後に、学部長とは一体どのような存在なのか、どのようにあるべきか、自問自答すれば、各学部長経験者は各々思いがあると思いますが、大学の教員には各々自己の専門の研究があり、組織的に学部としての意見の一致は難しいし、企業のように上下関係も明確でないため命令系統もはっきりしておらず、このような状況の中で、学部長就任当初より風通しのいい学部を目指して何とか楽しい和やかな学部作りができればとの思いで、私は学部長を務めてきました。学長、学部長などの職責にあるものは、大変難しいことではありますが、私心を捨ててその職務を全うすべきだと思います。その人の個人的な好みや希望や感情によって判断され、意思決定され、実行されるのではなく、公益性に基づいて、合理的に判断し、意思決定し、実行しなければならないと思います。この点は大学院開設に際して2度の苦い経験をした私の実感です。

以上、事実に基づいて記憶をたどりながら率直に私なりに申し上げてきました。しかし、差し障りのある方もおられるかと存じますが、ご寛容頂きたく存じます。私の6年間の学部長時代に学部で一緒にいただいた教職員の皆様には大変お世話になりました。皆様の支えがなければ学部長など務まるわけがありません。この場を借りて厚く御礼申し上げます。有難うございました。今回50周年を迎えましたが、さらなる50周年に向けての期待を込めて、駄文で大変失礼しましたが、この辺でペンを置く、いやワードを閉じたいと思います。